

文章作成の手引き

皆さんのなかには、レポートや論文形式の文章を書く訓練を受けたことがない人が多いのではないのでしょうか。皆さんの先輩たちのレポートや論文を読むと、そのことがよく分かります。たしかに、良い文章を書くにはそれなりの訓練が必要です。とはいえ、いくつかの点に注意するだけで、文章は見違えるほど読みやすくなります。レポートや論文の作成で最も重要なのは内容ですが、それを表現する力がなければ、せっかくの内容も台無しです。そこで、レポート・論文形式の文章の書き方に関する注意点をまとめました。

1. 読みやすい文章とは

皆さんが大学に入学してから、あるいは卒業して色々な仕事をする際にも、レポート形式の文章を書く機会はたくさんあります。レポートは、自分の考えを他人に伝えるために書くものですから、できるだけ読みやすい文章を書く必要があります。読みやすい文章は、基本的な作法を守りながら、論理が明快で、簡潔な表現で書かれています。

文章を書く際の基本的な作法に従うことが、読みやすい文章を書くための第一歩です。特に注意すべきなのは、段落と字下げ、句読点の使い方、文末書式の統一です。多くの人にとって当たり前のことかも知れませんが、それを守れない人が必ずいるので、分かっている人も、もう一度確認して下さい。

文章の作法が守られていても、文章を構成する文そのものが分かりにくければ、読みやすい文章とは言えません。よく見かける悪文は、主語と述語が対応していない文、非常に長い文です。また、コンピューター時代ならではの誤りですが、変換ミスも見逃せません。この手引きでは、例題を使って、皆さんが陥りやすいミスを説明しています。

レポート形式の文章では、参考にした文献を正しく引用することも重要です。最後に、これらの点について解説しています。

2. 文章の作法

皆さんの書く文章のなかには、ただ文が並んでいるだけで、非常に読みにくいものがあります。レポートは他人に読んでもらうためのものですから、読みやすいように体裁を整える努力をしましょう。

(1)段落と字下げ

文章は複数の文が集まったものですが、文がずっと続いていると、非常に読みにくくなってしまいます。そこで、読みやすくするために、文章をだいたいの意味のまとまりごと

に区分します。これを段落といいます。段落は、最初の1文字を空けてから書き出します。最初だけ1文字分下がっているのが「段落」というようです。

段落は、意味のまとまりごとに区分するのが基本ですが、そうすると段落が長くなりすぎたり、細かな段落ばかりの文章になったりしてしまふことがあります。見やすさ、読みやすさという点だけからいうと、1つの段落は5から10行程度が適当です。もちろん、意味の区切りを無視して段落を区切ればかえって読みにくくなるので、段落を区切る基準は意味のまとまりを基準とするのが基本です。この行数は、あくまで1つの目安として参考にして下さい。

(2)句読点の使い方

1つ1つの文は句点「。」で区切ります。これは、文章の末尾に打つと決まっているので問題ないでしょう。しかし、読点「、」は書き手の裁量に任されているので、注意が必要です。読点は、文の前後の関係を明確にするために使用します。少なすぎても、多すぎても文が読みにくくなります。読みやすい文章かどうかを確認するため、文章が完成したら、何度も読み返してみましょう。

(3)文末書式の統一

文章の最後は「です」「ます」とするか、「だ」「である」とするか、どちらかに統一しなければなりません。しかし、文章を書き慣れていない人は、文末書式の統一ができていないことがよくあるので、注意して下さい。

また、「です」の使い方が間違っている事例をよく見かけます。「です」は「である」「だ」の丁寧表現ですから、「です」を「である」「だ」に置き換えてみると正しく使われているかどうかを確認することが出来ます。

×	今日は楽しいです (楽しかったです)。	→	今日は楽しいだ (楽しかっただ)。
○	今日は楽しい一日です (でした)。	→	今日は楽しい一日だ (だった)。

なお、ゼミのレポートや卒業論文では「である」を使います。「～だ」は、雑誌などの記事、随筆や紀行文などに使われることが多いので、論文が随筆風になってしまいます。論文でも使われることはありますが、「である」が一般的です。

(4)誤字・脱字

コンピューターでの文字入力に慣れていない人の文章は、タイプミスや誤変換によって引き起こされる誤字・脱字の多いものになりがちです。これも、文章を完成させたあとで読み返し、誤りがないかどうかを確認することで減らすことができます。

(5)文語と口語

皆さんが書く文章のなかで、ときどき口語表現(話し言葉)を使っているものを見かけます。しかし、レポート形式の文章では、文語表現(書き言葉)を用いなければなりません。

たとえば、最近よく見かけるのが、「なので」という言い回しを接続詞として使っている文です。本来「なので」は、「～なので」というように、文の途中で使う表現です。最近では、話し言葉のなかで、接続詞として文頭に「なので」を使う人が増えているため、書き言葉でも同じような言い回しをする人が出てきているようですが、これは正しくありません。この「なので」にあたる表現には、「したがって」「だから」「それゆえ」があります。もし文章を書いていて「なので」を使いたくなったら、これらの語に置き換えましょう。

- × 貧困は社会問題である。なので、何らかの政策対策が必要である。
- 貧困は社会問題である。したがって、何らかの政策対応が必要である。

3.良い文・悪い文

正しい文の形式を理解したら、次に良い文・悪い文についての注意点を説明します。良い文というのは、文の修飾関係が明確な文のことを言います。これが明確でなかったり、不適切だったりする文は、読みにくい悪い文となります。悪い文のなかでよく見かけるものには、主語と述語が対応していない文、文が長すぎて主語と述語が分かりにくくなっている文があります。

イ)主語と述語が対応していない

主語と述語を対応させることは、文を書くうえで最も基本的なことですが、これができていない文を書く人は少なくありません。次の例題のうち最初の文では、「日本経済は」と「経済格差が」の二つの主語があるため、おかしい文になっています。これは、その次の二つのいずれかのような文にするのが適切でしょう。

- × 日本経済は、1990年代以降、経済格差が拡大していった。
- 日本では、1990年代以降、経済格差が拡大していった。
- 日本の経済格差は、1990年代以降、拡大していった。

ロ)文が長い

1つの文が三行以上にわたる場合、その文は長すぎると考えた方がいいでしょう。文が長いと、文の意味が不明確になりやすいので注意して下さい。文章はできるだけ短い文に分けるよう、心がけましょう。

- × 日本の経済格差は、1990年代にバブルが崩壊し、業績の悪化した企業が人件費を削減するために正社員の新規採用を抑制し、非正規雇用の労働者に置き換えたことで低賃金労働者が増大したことに加え、為替や株の取引が活発化したために膨大な利益を得る一部の人の所得が増加したために拡大した。
- 日本の経済格差は、1990年代に拡大した。その原因は、主に二つある。ひとつは、企業がバブル崩壊後に悪化した業績を回復させようとして、正社員の新規採用を抑制し、低賃金の非正規雇用の労働者に置き換えたためである。もうひとつは、為替や株の取引が拡大し、膨大な利益を得る一部の人の所得が増加したためである。

ハ)同じ接続詞が続き、文意が不明確

少し複雑な問題についての文章を書いていると、論理が分かりにくくなってしまいます。たとえば、次の例では、「しかし」という接続詞が続いて、分かりにくい文章になっています。この場合、接続詞の使い方を工夫することで、スッキリと分かりやすい文章になります。

後の文では、「しかし」以降の文が筆者の最も主張したい点です。前の文では、「しかし」が続くため、この点が分かりにくくなっています。

- × 近年、ジニ係数からみた日本の所得格差は拡大している。しかし、ジニ係数の上昇は人口構造が高齢化しているためであるから、見せかけの格差拡大だという議論もある。しかし、高齢化が原因だからといって、格差拡大が見せかけであるという議論は、貧困層の増大という問題を不可視化してしまいかねない。

○ 近年、ジニ係数からみた日本の所得格差は拡大している。これに対して、ジニ係数の上昇は人口構造が高齢化しているためであるから、見せかけの格差拡大だという議論もある。しかし、高齢化が原因だからといって、格差拡大が見せかけであるという議論は、貧困層の増大という問題を不可視化してしまいかねない。

ニ)単なる感想文

レポートや卒業論文は、読書感想文ではなく、あくまでも論文ですから、「～と思った」「～と感じた」といった単なる感想を述べるだけではいけません。参考文献を読んで自分が考えたことを論理的に説明する必要があります。

ホ)根拠が不十分

ものごとについて論じる際には、根拠を明示する要があります。次の例のうち、前の文は高齢化がなぜ所得格差を拡大させるのかが説明されていません。後の文のように、この点を説明すると、文章の説得力が増します。

× 日本の所得格差は、高齢化の影響で拡大した。

○ 高齢者は他の年代と比べて所得格差が大きいので、1990年代以降、高齢者人口の割合が高まった結果、日本全体の所得格差が拡大した。

4. 文献の参照方法

レポート形式の文章では、他人の文章を参考にしたり、引用したりする場合、その出典を明示します。文献の引用方法にはいくつかの方法がありますが、さしあたり以下の方法を覚えておきましょう。

次ページの(例)の3行目では、大阪大学の竹文雄教授の「人口高齢化効果によって1984年から99年にかけての所得不平等度の実際の変化のほとんどが説明できる」という文章を引用しています。その文章が引用文だと分かるように「」でかこみ、括弧のすぐ後ろに(著者名、出版年:ページ)を記します。同じように、5行目には内閣府の見解を紹介しています。文の最後には、その根拠となる資料名を示しています。さらに、これらの文献名や資料名は、文章の最後に参考文献リストとして列挙します。

文章を引用する方法

本や論文を引用する場合	「引用文」(著者名、出版年：ページ)
Web ページを引用する場合	「引用文」(著者名または発行者名、発表年)

参考文献の書き方

単行本	著者名 (出版年) 『書名』 出版社。
論文	著者名 (出版年) 「論文名」 『書名』 出版社。
政府文書など	発行者 (公表年) 「文書名」。
Web ページ	著者名または発行者名 「文書名」 発行日、URL(最終閲覧日:日付)

なお、Web ページには根拠のない情報や主観的な意見が書かれていることも多いので、注意して下さい。皆さんがよく利用する Wiki ペディアやブログなどは、しばしば間違った記述や不正確な記述があります。インターネットで得られる情報は、考える際のヒントにするのは構いませんが、引用したり、利用したりする場合は、情報の信頼性や信憑性について十分確認して下さい。

例)

2006 年には、「格差社会」という言葉がマスメディアで盛んに使われるようになり、国会でも所得格差拡大が政府の政策によるものかどうかという点をめぐり議論が交わされた。これに対して大竹は「人口高齢化効果によって 1984 年から 99 年にかけての所得不平等度の実際の変化のほとんどが説明できる」(大竹、2005:27) と述べ、さらに内閣府も「格差は見せかけに過ぎない」とする見解を示した (内閣府、2006)。

...

参考文献

大竹文雄 (2005) 「所得格差は拡大したのか」 『日本の不平等』 岩波書店。

内閣府 (2006) 「月例経済報告等に関する関係閣僚会議資料」 (2006 年 1 月)。

<http://www5.cao.go.jp/keizai3/getsurei-s/0601.pdf> (最終閲覧日：2007 年 12 月 1 日)。

文章作成チェックリスト

どんなに文章を書き慣れた人でも、良い文章を書くためには、文章を書いたあとで何度も読み返して誤字脱字がないか、分かりにくい表現がないかなどを点検します。皆さんも、レポートを書き上げたら、以下の項目について確認しながら文章を読み返し、文章を磨き上げて下さい。

文章形式上の注意点

- 文章が適度な長さの段落に分割されているか
- 段落の最初は一字下げているか
- 文末の書式が統一されているか（原則として「である」とする）
文末が「です・でした」の場合、「だ・だった」に置き換えてもおかしくないか
- 誤字脱字がないか
- 口語表現（話し言葉）を使っていないか

文章表現上の注意

- 主語と述語は一致しているか
- 長すぎる文章はないか
- 同じ接続詞が連続して使われるなどして、論理が不明確になっていないか
- 議論の根拠を示しているか

レポート作成上の注意

- 参考文献や引用文献を適切に参照しているか
- 根拠が曖昧なインターネット情報を参照していないか
- 参考文献リストがあるか